



山尾三省さんのみたまに捧ぐ～没後10年に 鎌田 東二 (NPO法人東京自由大学理事長)

10年前の2001年8月31日、わたしはその年の7月に開設したばかりの自分のホームページの鏡リュウジさんとの満月の夜の公開文通「ムーンサルトレター」に、山尾三省さんが亡くなったことを綿々と書き綴り、その中で次のように書いた。

「『アニミズムという希望』のあとがきを山尾さんはこう書き始めています。「ヒトという生物の特徴はさまざまにあるが、その中で欠かすことのできないことのひとつは、それがカミ(神)という意識を持つ生物である、ということであるだろう。東洋の広い地域の人々にとっては、それは仏という意識におきかえられる。カミ(神)ないし仏という意識は、意識のひとつの究極として訪れるものであるから、それを受け入れるにせよ、否定するにせよ、もしヒトが十全に生きたいと願うならば、避けて通ることのできない主題であるということができる。」

山尾さんは、「カミ(神)という意識や仏という意識が、これまではなかった新しい地平において、もう一度とらえ直され、吟味され、再構築されるべき時に私達は立っている」と主張していますが、わたしもまったく同感です。わたしの「水神伝説」や「神界のフィールドワーク」以来の仕事のほとんどすべてはその問題にアプローチしているといえます。

山尾さんはまた、「森羅万象に向きあう個人が、その中の一象に意味性や喜びとしてのカミを見いだし、それを他者と共有していく新し

いアニミズム思想は、個人が個人でありながらそれを超えていく自由を内蔵していると同時に、環境問題という私達に突きつけられてある必須の課題を解決していく、小さいけれども重要な方法論でもある」と述べていますが、わたしたちが「東京自由大学」というフリースクール、市民大学を立ち上げた時にも、一人一人の霊性の自由と尊厳と友愛の共同体の両立という共通の問題意識がありました。

山尾さんはわたしにとっては、そのような新しい意味と意識の地平における「神仏」探究の先達であり同志でした。「カミを詠んだ一茶の俳句」の冒頭は、「この宇宙、この地上の森羅万象には靈魂が宿っており、カミと見なされるという思想は、ほくにとっては存在の根源を揺さぶってくる新しい希望である。その思想をアニミズムと呼ぶ」という、19世紀の思想界の「共産党宣言」に代わる、21世紀の思想界の「アニミズム宣言」とでもいうべき希望のヴィジョンが掲げられています。」と。

それから丸10年。NPO法人東京自由大学では山尾三省の精神を引き継ぐとともにその功績を顕彰するための催しとして「三省祭り」を開催している。本年10月29日にはその3回目を実施する。3回目の今回は、「3・11」東日本大震災後を生きるわたしたちのこころとたましいの深いところに鳴り響いてくる三省の三つの遺言を自分たちの生き方と社会のあり方として掘り下げ、未来を切り拓く「詩=希望」を見出し、さらに深く力強く山尾三省の「詩魂」を愛肉したいと思う。

屋久島夏合宿終了報告 担当:岡野恵美子・鳥飼美和子・井上喜行

屋久島夏合宿(2011年8月27日～31日、4泊5日)の研修旅行が無事終了し、全員無事に帰宅しましたことをご報告します。

屋久島在住の山尾明彦さん(三省さんの弟)、山尾春美さん(三省さんの奥様)、山縣幹夫さん(あがた森魚さんの弟、天然村経営者)、張明妃さん(天然村に住んでガイドなどをなさっている女性)が労を惜みず暖かい多大なご協力をしてくださいました。おかげさまで屋久島での滞在が非常に充実した内容になりました。

鳥飼否宇さん、中野民夫さん、あがた森魚さんがご縁のつながりで、合宿に非常なご尽力をしてくださり、安全な豊かな日々を創りだしてくださいました。否宇さんの運転と適確な判断、ガイドがあったお蔭で、安心して過ごすことができました。

中野民夫さんの「本然庵」は800坪の広さがあり、モッコヨム岳を目の前にして、敷地内に川も流れているという素晴らしい環境にあり、そこで過ごさせていただいたワークショップは、別世界のような心地よさでした。

あがた森魚さんは初日のライブをはじめ、毎日、すばらしい歌を聞かせてくださいました。屋久島でのあがたさんの歌は、他の場所では聴けない輝きがあるように感じ、音楽の力に魂を揺さぶられました。

海野和太郎先生の存在もありがたいことでした。鎌田先生も超ご多忙の中、駆けつけてくださり、講話をしてくださいましたが、歌が好評でした!

そして参加者の方々全員の暖かい情に満ちたサポートがあつてこそこの毎日でした。こころよりお礼を申し上げます。ライブ、三省さんの法要、白谷雲水峡トレッキング、本然庵でのワークショップ、大川の瀧と海辺での遊び、屋久島のガジュマル、屋久杉ランドと、毎日が色合いの異なる愉快な旅でした。

最後に鹿兒島では、大重監督の助言をいただき、尚古集成館に立ち寄り、桜島も間近に眺められ、良い思い出になりました。心配していた台風の障害もなく、無事に皆様が予定通り帰宅され、担当として感謝するばかりです。ありがとうございました!

2011年度前期講座報告

ボディワーク

『身体の探究 水を体感する・滝行』

鳥飼 美和子 (担当・理事・副運営委員長)

東京自由大学の滝行は、水を体感するのが目的です。自然の滝を身に受けて、水の力を直接体験することにより心身の変容を実感します。日本の絶妙な自然のバランスの中で生れ、育てられてきた修行法である滝行ですが、それは自然と人間の付き合い方を学ぶ方法でもあります。自然は人間の思惑とは別に、時に恐ろしいほどのダイナミックな力を発揮します。今年は水の恐ろしさを実感する災害がおこり、私たちは自然の恐ろしいまでの実態を目の当たりにしました。

今年は、自然の滝の美しさや素晴らしいさを実感していたきつつ、自然には驚異的な力があるという両義性を認識

7月2日

しつつ、人間が如何に自然と共に生きられるかを考えるひとつのきっかけとなってほしいと願いつつ、心して滝行の当日を迎えました。

今年は7月の一回のみです。幼稚園児から80歳代まで、今までになく年齢層が広い参加者の皆さんをお迎えしました。大雨が心配されましたが、ちょうど滝行の時は太陽の光に恵まれ、緊張の中にも新鮮な心持で滝に打たれました。滝行後の温泉は、タクシーの運転手の方の紹介で、初めてのところに行き、最後は海の幸を味わいました。全員ケガなく終了できたことを天に感謝いたしました。深謝合掌。

編集後記

2011年度4月の特別企画シンポジウム「シャーマニズムの未来～見えないモノの声を聴くワザ」、8月末の「屋久島夏合宿研修旅行」は多勢の参加者の方達に支えられ無事終了しました。その成果をお伝えする特集ニュースレターをお届けします。10月は、多彩なビッグイベント……「仏教は社会に有用か」、映画「玄牝」上映&河瀬直美監督トーク、「三省祭り2011」が3週連続して東京自由大学会場で開催されます。ぜひご来場ください。

岡野 恵美子 (運営委員長)

事務局だより

井上 喜行 (事務局長)・渡辺 恵実 (事務局長)

今年度は5月28日に理事会、6月25日に総会がありました。会計上厳しい中、ぎりぎりの成果が報告されました。下半期に入り、この時期に開催意義の大きい「三省祭り」を始め、ビッグな催しが続きます。皆さまご参加ください。

事務局業務は、火・木・金 13:00～18:00です。お申込み、お問合せなど、お気軽にご連絡ください。

●http://homepage2.nifty.com/jiyudaigaku/ ●E-mail: jiyudaigaku@nifty.com

Newsletter Vol.17 2011年(平成23年)10月10日発行

編集・発行 NPO法人東京自由大学 / 事務局 〒101-0035 千代田区神田紺屋町5 T.Mビル2F TEL&FAX: 03-3253-9870
デザイン (有)アンビエンス / 印刷 (株)ベクトル

NPO法人 東京自由大学 Newsletter 2011.10.10 Vol. 17

東京自由大学2011年度夏合宿・感想文特集 2011年8月27日(土)～8月31日(水)

原生林と水の島・屋久島と山尾三省の詩魂を尋ねて

「東京自由大学の夏合宿に参加して」

鳥飼否宇 (同行者: ミステリ作家・NPO法人奄美野鳥の会会長)

山尾三省さんのことはずっと気になっていました。屋久島の廃村に庵を結び、地域を賦活再生するための活動に身を投じながら、詩を通して世界に平和を訴えかけるその佇まいがあまりにもかっこよくて。文学者として理想のあり方かもしれません。同じく離島に住み創作めいたことで生計を立てている不肖の身としては、三省さんは畏れ多くて近寄りたがたい存在でした。だから、気にかかりながらも、ずっと見て見ぬふりをしてきたのです。

今回、半ば巻き込まれる形で本合宿に参加させていただき、はからずも愚角庵を訪れるはめになり、傾きかけた書齋に一步足を踏み入れたとたん、呪縛が解けたような気持ちになりました。うまい言葉が見つかりませんが、三省さんの日常生活の場をまのあたりにしてほっとしたというか。三省さんは別に神がかった人なのではなく、愚直に勤勉に努力した結果、あれだけの仕事をなさったのだと気づいたというか。その後三省忌にも出席し、故人を偲ぶ知人の皆様方のお話を聞くにつれ、三省さんの温かい人柄が伝わってきて、いっぺんに距離が近づいた思いでした。

予想を超えた大きな出会いだったのでしょ。屋久島から戻って気がつくと、アマゾンで詩集「祈り」を注文していました。これから私と三省さんのつきあいが始

「『今ここ』と『水の旅の終焉』」

中野民夫 (現地講師: ワークショップ企画プロデューサー)

夏合宿の一日をご案内させていただいた中野民夫です。モッコヨム岳の麓の本然庵で、身体や心をゆるめつつろぎ、豪快な大川の滝とその水が海に還る浜を一緒に楽しみました。参加された皆さんにとって、なんかか印象に残る体験になっているのなら幸いです。

28年前に山尾三省さんを初めて屋久島に訪ね、様々なご縁が重なって5年前には尾之間の山林に本然庵という「道場」(鎌田さんがこう表現してください気に入りました)を建て、年に数回、「人と人・自然・自分自身」をつなぎ直すワークショップを始めています。東京での会社勤めを続けながら、縁ある方々が本来の自然に触れる案内役を重ねています。

世界遺産になり縄文杉が有名になってから、「屋久島に行きたい」と思う方が増え、1万5千人の島に今年年間40万人もの観光客が訪れます。ステレオタイプな情報の偏りはすさまじく、「縄文杉」「白谷雲水峡」「海ガメ産卵」等に人が集中し、様々な弊害も出てきています。周囲130キロの大きな島にいい所はたくさんあるし、なによりも都会の慌しいペースで消費するように観光スポットを走り回るのは、実にもったいない限りです。

今回、皆さんの貴重な一日の時間をお預かりするにあたり、なるべくシンプルな構成で、じっくり味わえるひと時にしようと思がけました。少しふりかえってみます。本然庵で清流の水でお迎えし、簡単なオリエンテーションのあとは、森のステージで、気功の鍛錬を長年続けておられる鳥飼美和子さんのリードで、身体を調え、リラックスすることから始めました。「調身・調息・調心」という言葉があります。まず身体を調える、すると息が調い、いつのまにか心も調ってくる、という順番があるのです。肩など身体をゆっくりほぐし、次第に周囲の森の自然と一体化するような気功でほぐりました。

休憩後、ほくが引継ぎ。他の人のおなかに手を当てさせてもらったりして「呼吸」を少し意識してみました。生まれてオギャーと泣いてから、最期に息を引き取るまで私たちの生命を支えてくれている呼吸。呼吸を通して屋久島だけでなく世界中の森と酸素や二酸化炭素を呼吸合っています。普段あまり意識することのない呼吸ですが、ありのままの呼吸を丁寧に意識することは、「今、ここ」に在ることを思い出させてくれます。

ベトナムの仏教者ティク・ナット・ハン師は、「今ここで起っていることをはっ

まります。

もうひとつ得難い出会いがありました。あがた森魚さんとご一緒させていただいたので。高校時代に「僕は天使じゃないよ」をひょんなことから買って衝撃を受け、その後も『乗物図鑑』や『バンドネオンの豹』を通じて、オリジナリティ抜群のノスタルジックでポップでパンクな音世界に耽溺したものです。予習かたがた久しぶりに購入した「俺の知らない内田裕也は俺の知ってる宇宙の夕焼け」の完成度もすばらしく、お会いするのを楽しみにしていました。

毎晩生の歌声を聴かせていただいたのは言うまでもなく嬉しかったのですが、なにより夜遅くまで焼酎を飲みながら歓談させていただいたことは望外の喜びでした。あがたさんの自然体での創作活動を見習い、私も精進せねばと元気づけられました。この思いがけない縁は、なぜか長く続く予感がしています。

他にも素晴らしい出会いがたくさんありました。長沢哲夫さんの鋼のような言葉の響き、山尾明彦さんと春美さんの柔和な笑顔、天然村のオーナー山縣さんの林訥な話しぶり、中野民夫さんの別荘本然庵の快適な空間……どれも忘れられない思い出です。本合宿の参加者の大半の方々とも初対面でしたが、キャラクターに富んだ集団で、楽しい時間を共有できたのは本当にありがたかったです。また、これだけのツアーを企画運営された実行委員の皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。

当初運転手専任だと信じており、ろくに屋久島の自然について学習もせずにガイドを引き受けたために、十分な説明ができず申し訳ありませんでした。いつかどこかで雪辱を!

きりと知ること」が「瞑想」だと教えてくれます。呼吸を聴いているはずが、いつのまにか様々なことを考えたり、思い出したりしがちな私たち。その心の中のおしゃべり、雑念にも気づく。振り払うのではなく、そのありのままをまず認識し、しばらく抱っこしてから手放す。そんな風に自分の心の中で起こっていることとつきあう方法も練習してみました。

先を求めて走り続けている私たちは、もう身体は屋久島に着いていても、心はもっと先に何かがあると漁りがちですが、目的地は常に「今とここ」のはず。普段の時間が止まったとき、初めて立ち上がってくる自然を感受できる瞬間もあったのではないのでしょうか?

大川(おおこ)の滝と、その滝がまた静かな川の流れになってしばらく流れ、ずっと海に流れ込んでいく大川の浜は、ほくが大好きな場所です。

黒潮の湿った空気が、花崗岩が隆起してできた屋久島の高い山々に当たって上昇し、冷やされ、雲になり多量の雨を降らせる。この雨が山を下り、森のいのちを潤し、人々の暮らしも潤す。ある流れは、豪快な88mもの大川の滝となって水の旅のクライマックスを迎える。そして再び静かな流れになって、ついに大きな海に還っていく。水の循環が目の前で見えやすい屋久島ですが、その水の旅のピークと終焉を体感できるのがあそこです。

清流の淡水が、山から枯葉や小石をたくさん運びながら、塩辛い大きな海の波打ち際へと流れ込んでいき、あっというまに一体になっていきます。静かに溶け入っていきます。もし、「死」というものが、このようにひとつの旅を終えて母なる大海にすっと還っていくことだとしたら、それはとてもほっとする、大安心とでもいえるものではないか、思うのです。

人によって様々な感じ方をされたかと思いますが、案内役としてこんなことを考えながらご案内していました。(なんらかふりかえりの参考になったのならうれしいです。)

40代後半になって歌い始めた鎌田さんに刺激され、ほくもいつかほと思っていました。最近ようやく生まれた「ガーテソング(般若心経の歌)」を、本然庵の時間の最後に歌わせていただきました。鎌田さんに「般若心経の意味をよく捉え、わかりやすい言葉でうまく表現している」とほめていただいたことは望外の喜びでした。図ののって、もっと創りたいものです(笑)。

東京自由大学は発足の前後からご縁がありながら、最近はなかなか余裕がなく、参加できていませんでしたが、今回このような形で一緒できて、本当にありがたかったです。このような機会を与えてくださり、ご一緒させていただいた皆様、ありがとうございました。今後ともどうぞよろしく願います。



8/27(土) 宮之浦会館にてあがた森魚さん、長沢哲夫さんのジョイントライブ



8/28(日) 山尾三省さんのお墓参り



8/28(日) 山尾三省さんの年忌法要参列



8/28(日) 子供たちの詩の表彰式(オリオン三つ星賞)



8/29(月) 白谷雲水峡トレッキング



8/30(火) 天然村にて地元の人々との交流、懇親会



8/31(水) 屋久杉ランドトレッキング



「2011屋久島紀行」 津田 智子(会員)

屋久島の森に入るといろんなものが見えてくる。直径5メートル近くある切り株、長さ10メートルほどの倒木、そしてそうした過酷な場所に根を張って力強く天に向かって伸び続ける二代目の木々。生まれてこのかた見たこともない巨石の数々、そうした巨石や木々や土を所構わず美しく覆う苔、ふさふさで柔らかい苔に張り付いた水滴の輝き。あちこち駆け巡る水流。仲間の誰かが「森は生きています」と言った。作家田口ランディさんは屋久島を「水のゼリーに包まれた島」と表現している。思わずうなずいてしまう。モッコム岳を眺めながらの気功と瞑想は五感すべてが喜ぶ至福のひとつだった。午後には川と海で遊んだ。森から流れ下ってきた冷たい水が火照った体に気持ち良い。ごつごつした川底の石が足裏を刺激する。川の流れて身を任せる心地よさを久しぶりに味わった。体全体で水に触れ、水を感じた。

大自然は人間には計り知れないほど大きい。そんな自然に触れていると心の中のモヤモヤがすべて消え去っていくような気がする。屋久島で思いっきり自然に触れた後の私の心は旅行前より確実に軽くなっている。鎌田先生のおっしゃる儀式の元となる「スピリット」とは、この意識の変容をもたらす力のことなのかもしれない。山尾三省さんが詩情あふれるエッセイの中で繰り返し訴えていらっしやるアニミズムの力というもののことなのか。わずか5日間だったが、三省さんの真髓(詩魂)に触れることのできる、素晴らしい旅だった。鎌田先生、そして東京自由大学のスタッフの方々、このような機会を与えて下さいまして本当に有難うございました。

「循環のなかに」 中村 紀子(一般)

震災の少し前から、足もとのおぼつかなさや気持ちの悪さを感じていました。地面に近づく必要があるのではないかというのは論理ではなく直感でしたが、もう少し自然の近くにといて、それはガーデニングでもなく、3月上旬に出会い頭で森を作るというグループに参加することにしました。そして一本も植えないうちに3月11日が来、過ぎていきました。あの日から今まで、2度木を植えました。人は森に寄生している、森をなくせば人も生きてはいけません。我々は土地本来の木を植え、鎮守の森を作らなければならない。森づくりの大リーダーである宮脇昭先生のこのような理論に基づく植樹には教えられることは多く、植樹をした時に土を触る手指から受けた刺激は、机の前ではわかり得ないものでした。でもヒトのための木を植えるようで、どこかに違和感がある。文明とは無関係に人間の暮らしを破壊したあの波々と同じように、ヒトと関係のない木々、ヒトを脅かすような木々の中を歩いてみたい。そうすれば森というものを直に感じられるのではないか。恐ろしいほどの森を歩き、感じることを期待して参加したこの夏合宿は、その意味では期待とは異なる果実をもたらしました。屋久島は「着生」なのだ、とネイチャーガイドをしている福岡出身の知人は教えてくれました。着生。植物などが他のものに付着して生育すること。そう意識して思い返せば、白谷雲水峡やヤクスギランドで視界を濃淡の緑に煙らせる美しいコケ類の、地に根を張らず、他の力を利用して空中高くまで居場所を広げていく姿が象徴的に思い出されます。また、切株の上に力強く伸びた木々もあり、半着生、寄生、更新といった生循環の違いは素人目には判断つきませんが、ただ、先に生を享けた者や生き残った者に寄りかかり、宿り、あるいは命尽きたものの上に芽吹いて生をつなぐ新しい命の容赦ない姿が、逆毛立つような気持ちで思い返されます。人の手などいらない森は、ただ循環のなかにありました。しかしそれは植物だけの話ではありませんでした。都市から距離を置いた丸い島の周縁部で、東京から居を移した一人の詩人の切株にひこばえが芽吹くのを見ました。一人の音楽家の波動の刺激は、この先広がってゆける未開拓の感覚を知らしめました。多様多色な先輩方の独立と共生と寛容に触れ、自分もまた着生する個体と知り、そしてまた、直接の子孫を残さなくとも、倒れた後に苗木になる可能性を有難く思いました。

自分もまた自然としての循環の中にある。知識としては知っていたはずですが、それを肌で感じられたことに感謝しています。ありがとうございます。

「懐かしい屋久島」 海野 和二郎(東京自由大学学長)

谷川の水を手ですくって味見をしていたら、滑って川へ落ちてしまった。服のまま、少し上流へ泳ぎ、浅瀬から岸へ上がろうとしたら足場が悪く、よろよろしていたら、それを見つけた何人かの人が手取り足取り助けてくれた。そんな異変もあったが、屋久島はなんとも懐かしい島であった。千年杉や山尾三省さんのこともあるが、郷里山梨の八ヶ岳や甲斐駒の風物、子供の頃親しんだ海亀で有名な南国阿波日和田の海岸に良く似た海浜、これらすべての思い出がよみがえった。島の起源は、観光案内によると約1500万年前の火山島、ということであった。多分、新世代第3紀から第4紀にかけての造山活動によるもので、郷里の八ヶ岳や甲斐駒・鳳凰三山などと似ていても当然なのかもしれない。

「2011年度夏合宿 縄文杉感想文」 本田 佐由里(一般)

やっと会えたね、やっと会えたね、涙ぐみながら縄文杉にしがみつくようにしてつぶやいていた女の人の姿をテレビで見たのは、もう何年前のことだろう。今では環境保護のために縄文杉のまわりはテラスで囲われ、近付くことは出来ない。けれど、「やっと会えたね」そう言って涙ぐんでいたあの時の彼女の気持ち、わからなくもない。遠い、実に遠い、往復10時間歩き通すのだ。幾千年もの時を動かす、ただ立ちつくす屋久島の樹々たち。

南無淨瑠璃光
樹々の業師如来
われらの沈み悲しむ心を祝わしたまえ
樹ら尽くすその青の姿に
われもまた
深く樹ら尽くすことを学ばせたまえ

と祈りの詩に詠まれた時より、どれほどの時が過ぎたのだろう。ガイドのかおりさんの話では、今では年間何万人もの人が縄文杉に会いに来るといふ。縄文杉の前にしつらえられたテラスで、微笑みピースサインを出して写真を撮る嬉しそうなお人達のエネルギーが縄文杉に伝わったのか、今では縄文杉の幹にステキなスマイル顔がくっきり浮かび上がってきているのには本当に驚いた。歩き疲れやっとの思いで帰りのバスに乗り込み、座席の窓ガラスにぐったりと頭を寄せ、思いおこす。息も上がり、苦しみの極に達し、早い話が死ぬかと思ったと言い切りたいほどのトレッキング。こんな経験一生に一度で充分と思いつつも、どこか心の奥の片隅にぼっと炎がもったような感覚。ガイドのかおりさんを一人じめし、二人で辿った屋久島縄文杉コースのトレッキング。これがどれほど豊かで感動的だったか。森の水場で一緒に食べたお弁当、(ほら、トトロがさげ持っているあの緑の包みと同じもの。私の人生の中で最高に嬉しかったものの一つ) おいしかった! 自分の体力と脚に自信のある人、是非、縄文杉に会いに行ってみてほしい。原始の森 屋久島 “古代インドの思索が呪法から哲学へと変容する過渡期に花開き、その後多岐にわたるインド哲学を生んだ” ウパニシャッド。家族とともにインドへ渡り、最後の住処は屋久島の森の中。オリオンの星の導きを通し、古えの教えを受け入れ生きようとした人、それが山尾三省という人のような気がする。夜の静けさの中原稿を書こうと、私が初めて出会った三省さんの本「桃の道」それを手にしようとしたその時、ふと聞こえた。桃の道はコワイから 私の空耳か……。静かな気持ちで 火を焚こうか。

「夏合宿に参加して」 田中 よしみ(会員)

屋久島の 太古の森は 息づきて 踏み入るものをば 見定めん
古き記憶の ありやなしやと
初めてもののけの森に入った時の思いを詩にしたものです。この森だけは力強い息吹をそのままに、消えないでほしいと思ひ、二度と踏み入るまいと思ったものです。けれど、ロジ八重岳山荘のスタッフの方は、屋久島の緑が変わっていつていると呟いていました。初日の夜、ジョイントライブでのナーガさんの詩の朗読、目を閉じて聞いていると、何故か般若心経が浮かんできました。旅の疲れはあれど心は浮き立ち、心地よい夏の夜を過ごさせて頂きました。二日目、山尾三省さんの事は聖老人を読んだくらいであり知識のないまま愚問庵の拝観、雨の中のお墓参り、三省忌と参加、心のこもった美味しいご飯を頂いて、流れるままに同行いたしました。

さわがにも 並びて手向け 三省忌

屋久島のエネルギーと美味しい食事で不調だった身体もだんだん元気になり、四日目、中野先生の別荘では鳥飼さんの気功と中野先生の瞑想を体験。モッコム岳から降りてくる風、寝転んで見上げれば大楠の張り出した枝から、木洩れ日があふれ、ついうとうとしてしまいました。人はこんな素敵な空間を作れるのかと鳥飼さんと中野先生に感謝。最後の夜、あがた森魚さんがお話の中で三省さんについて触れ、「森の書齋に入ったとき、三省さんはナルシストだと思った」と言われました。ご自分もナルシストでそうであることが大好きだと、言葉を選びながら説明して下さいました。ああ、そうなのか、と、頭の片隅にあって消化されなかったものが心地よく流れて行きました。三つの遺言、多くの出版物、家族を愛し、屋久島を愛し、日本を、世界を思っていた人。凄い方だとわかっていても、ただ信者の感情を持っての参加はするまいと思っていました。勿論、三省さんの文章や詩は大好きです。あがたさんは芸術家的感覚であのブレのない生き方が感じられる愚問庵を見たとき、美しいと感じたのではないのでしょうか。川沿いの書齋で素敵な言葉が見つかった時、一人でやりとしたのではないかと……。帰りはなぜか眠くて眠くて、船中も九州新幹線の中もひたすら眠ってしまいました。奇しくも、あがたさんと同じ列車でしたが、殆どお話しすることもなくお別れしました。そのようなわけで、はっきりした記憶は屋久島を背に船が出たこと。お陰で未だ背後に屋久島の気配があるのです。

屋久島は 幾多の生き物たずさえて 今日も静かに 青海に座す 善美

「森羅万象の中で」 戸田 妙珠(会員)

夏合宿から家に戻り、改めて山尾三省さんの本を手に取りました。初めて屋久島を訪れ、少しなりともその地を自分の足で歩きながら自然の力強い生命力を感じた時、私は三省さんが著した詩や散文等の世界が深く自分の中に息づいてくることを感じました。文明の利器に毒されている私が、三省さんの住んでいらっしやったその島で、第一に圧倒されたのは自然の荒々しいまでの力強さでした。覆い尽さんばかりに迫る木々。雨、雨、雨。いたる処に流れがあり、小さなせせらぎが次第に集まり、巨岩の間に水しぶきを立てながら海に向かってゆきます。地元の人々の話では、三省さんの住まいのある白川山は、島でも特殊な場所であるといひます。島の北部にあたり、冬は寒く、日当たりも悪く、農耕が難しい場所なのだそうです。そんな廃村に移住し、畑を耕し、妻と共に子供を育てながら、執筆活動を続けた三省さん。三省さんの文章からは何の愚痴も不満も見つかりません。森羅万象の中の一員としての自分を喜々として受けとめておられます。自然の過酷さも、美しさも、全てを神(カミ)のあり方として受けとめる——そんな中からしか、このような喜びは生れてはこないでしょう。

この文章を書きながら私は、屋久島へ渡ったその日から、失礼にも、三省さんの生活はどれだけ過酷なものであったであろうかと、見当違いなことばかり頭に浮かべていたことを思い出します。

日々の生活に追われ、私達は心の深い部分では覚知している、森羅万象の中の一員である自分を、ともしれば忘れてしまっています。聖なる山を崇拝し、聖樹を崇拝する思想からは、限りなく生きとし生けるものへの畏敬の念と慈悲の心が生まれてくるのですね。そのような心からしか、行動からしか、全ての人々の幸福は成就できないように思えます。屋久島への旅で、改めて自然と人間との関係を突き付けられた思いです。今在る自分の場で、今かかえている状況の中で、自然の一員である自分がどのように生きてゆくか。三省さんは天空のオリオンの星から、きっと私たちを見守ってくださっているのでしょうか。

「屋久島感想文」 加藤 順子(会員)

「屋久島は水の島である」というのが私の受けた屋久島の印象だった。それは島全体を包んでいる雲や雨であり、川や海なのだろうとおもう。旅のメインイベントである山尾三省氏の年忌法要と墓参では、スコールのような雨が大きな音を立てた。翌日には身を洗うかのような土砂降りの中、白谷雲水峡を這い上る。雲に包まれ、雨がからだを打つ。濡れた木々や苔の香りがした。また別の日には、燦々と照りつける太陽のもと山中の川に飛び込んだ。降り注いだ雨は山を駆けくんだり海へと選ってゆく。その流れにもぐりこみ、水中の音を聴いた。身体の外側だけで屋久島の水を感じたわけではない。ある時は雨の中、またある時はモッコム岳を望みつつ食べた弁当。食材の選択から調理法にいたるまで、大変に手がかけられたお宿の食事。屋久島で口にしたものはいずれも滋味豊か。それらの多くが近海で獲れる魚や、屋久島の水と大地が育てた野菜や穀物よりつくられたものであった。空に天の川があらわれる頃になると、あがた氏が歌の世界に導いてくれた。「生」にこだわった音と声が、耳だけでなく皮膚からも染みこむ。音に酔ったあとには、屋久島の名水からつくられた焼酎を呑みつつの座談会へ。屋久島の水や音、歌や人々の語りが渦を巻き、私の中にこれまでにない思いが立ち上がってくる。その中に「山尾三省」もゆるやかに形をとりはじめる。屋久島から持ち帰ったこれらのものが、今後どのように発展していくのか、楽しみにしたい。

悠久の 時刻む森 爽やかに
神宿る 太古の森の 星月夜
秋高し 屋久杉天を 突き上ぐる

夏合宿研修旅行
大変お世話になり、すばらしい旅になりました。
感謝の気持ちいっぱいです。

「白谷雲水峡」 金井 重(会員)

川ぞいの岩肌のぼり森に入る雨足はげし雲水峡ゆく
強き雨幹に小枝に木々の葉に落ち葉につもる聖域に入る
神宿る空洞の前おろおろと拍手をうち古木を拝す
木々をうつつはげし雨音奏つ、み見えざる神のしわぶきをさく
深き森雨足光り精気充つよるこびふるう木々の葉もわれも
時に雨小休止あり溪谷の激しき流れあめつらの生氣
ガジュマルの林に入りぬガジュマルの気根をゆらす涼風のなか
ガジュマルの気根にすがり一歩づ、帰省子のごと森を歩めり
ガジュマルの気根ににぎり右・左おんなターザン枝から枝へ